

おどばで定めた心定めを親神様がお受け取り下さり、その心定め通りにならせて頂いたということ。私は、斜里町分教会六代会長のお許しをおどばで頂いてすぐに思わせて頂いたのが後継者の御守護です。教会長になってすぐに後継の事を考えるのもどうかと思われるかもしれませんが、大教会に戻らせて頂きたいという強い思いがありました。そこでそのお運びの時に10年の間に後継者の御守護を頂いて交代させて頂きます。また更に会長は働かずに道一条で通らせて頂きますと、親神様・教祖にお誓いし、心を定めてきました。しかしそんなに簡単なものはありませんでした。会長のお許しを戴いて4年を過ぎた頃だと思えます。大教会長様と今後どうしたら良いかということをお話している中で、後継者の御守護を頂き、会長を交代して大教会に戻らせて頂きたいということをお話しましたら、そのような大きな御守護を頂きたいのなら、今のままでは御守護は頂けないので、心定めをしたらどうかとお話を頂きました。その時のつとめ方は、生

活は家族全員大教会に住み込ませて頂き、大教会が主で自教会には月次祭や用事があつた時だけ戻っていました。そして心定めとして、家族も網走から斜里へ引越し、自教会を主に大教会に通わせて頂くこと、私は大教会の朝づとめから夕づとめまでつとめさせて頂き、会長夫婦は130年祭の三年千日が終わるまで世間で働かないでをいがけ・おたすけに励ませて頂くという心定めをさせて頂きました。やはり斜里から通わせて頂くこと、吹雪いて行けなくなりそうになったり、また一番大変だったのは大教会において頂いた時より教会生活は思った以上に費用がかかったということです。やはりお金が厳しいと家内から言われ、働かないとやっていけない、どうしよたら良いかと話をしたこともありまして、おさしづに

一度定めた心変わらん一つが天然自然の理―中略―。(明治21年4月4日)とあります。心定めが出来なくなるような出来事や破ってしまう場面が必ず出てくるものですが、これは試しでこれでもかと試

されます。そのような中でも、変わりなく心定めを守り通らせて頂くことがその先の御守護、天然自然の理が頂けることになりまして。

そんな中、心定めを守り通らせて頂き、動かして頂くと、1年3ヵ月程で大教会へ戻らせて頂き、そこから約1年半で会長の交代をさせて頂きました。会長交代の返事をもらつてからはポンポンポンと話が決まり、新会長にもお金は心配するなと言いましたが、本当はお運び、奉告祭のお金は全然なく心配しておりまして。ところがこれも不思議と御守護頂きました。思ってもみないところからの御守護を頂き、親神様・教祖はこんなにも用意して下さったのかと親心を感じさせて頂きました。

最初会長のお許しを戴き、かんろだいで10年という年限の心定めから3年以上も短い御守護を頂き、6年ちよつとで会長の交代をさせて頂きました。私達が力を入れたらその分必ず親神様・教祖は倍の力で返して下さるということを実感したので、このように大きい心定めを

させて頂き、その達成のためにもまた心定めをさせて頂くことがあると思います。心定め心定めと何だか心定め縛られていようで窮屈に思うかもしれないませんが、各教会の毎年の人と御供の心定めを達成しよう、また少しでも御守護頂きたいと思えば何か動きを起こしたり、心定めをしたりするかと思えます。何もしなければ何も起こりません。心定めをさせて頂いたからこその動くことが出来、続ける事が出来るのです。

心定めについて話をさせて頂きました。初席者、中席者の御守護を頂くために、昨年よりも今年は動いて実行できるよう、更に個々に心を定めて頂き心定め達成の上につとめさせて頂きましょう。

真柱様の年頭あいさつに、「私達の基本、道を通り後に続く人をしっかり育てていく上において、歩み方の中で基本となるところを、だいたい忘れてしまっているのではないかと。だんだんと流されてしまつて、『まだ大丈夫やろ』と思つているうちに、気がついたら今のようになってしまつたというような気もする。」「前真柱様はよくこの場で、『去年よりも少しでも成人させてもらいたい』というようなことを、まずはお話しさつていたように思う。それは大切なことなので、情性というか、流れにまかせてしまわないように、つとめて頂きたい。」とお話下さいました。

この度、真柱様からお話しを頂くというのは、本当に有難いと思わせて頂きました。日頃通る中、情性にそのまま流される事無く、成人させて頂けることを実行させて頂くことと思わせて頂きます。

皆様には大教会の活動目標の初席者、中席者の御守護の丹精に努めて頂きたいのであります。これは直接おたすけに繋がってくることであります。そしてをいがけ・おたすけをさせて頂くと言ふことは真柱様が仰つている情性や流れにまかせてしまうことが、どんどんなくなつてまいります。各々がしっかり心を定め情性に流されることなく、大教会の110周年に向けて尚一層親神様・教祖にお喜び頂けるよう勇んで実行させて頂きましょう。